

=特集=

墓じまい —— 想いを受け継ぐ、それぞれの供養

近年、「墓じまい」という言葉を見聞きする機会が増えました。

少子高齢化や核家族化、都市への人口集中などを背景に、「お墓を守り続けることが難しい」という社会の変化の中で生まれた言葉です。遠方で暮らす家族、高齢になってお墓の管理が困難になった人、継ぐ人がいないお墓――。

家族のかたちや暮らし方が変わるなかで、供養のあり方も少しずつ姿を変えています。

だからこそ、想いをどうつないでいくか、をそれぞれが考える時代になりました。

いわき市の高蔵寺でも、

近年「墓じまい」や「供養の相談」に訪れる方が増えているそうです。この寺で長年、地域の人々に寄り添ってきた住職は、穏やかな口調でこう話します。

「墓じまいを推奨するわけではありません。代々受け継いでいくことが、本来いちばん望ましい姿だと思います。しかし、それが難しくなってきたのは言うまでもありません。時代が変わったのだなと感じています。永代供養や合祀墓なども、いまの時代に合った、供養の形のひとつかもしれません」

墓を「閉じる」ことは、決して軽い決断ではありません。そこには代々の想い、

家族の記憶、祈りの時間が積み重なっています。だからこそ住職は、
「終わり」ではなく、
「心」の整理として墓じまいを見つめています。

住職のもとには、迷いながら相談に訪れる方が多いといいます。

「お墓をどうしたらいいかわからない」「子どもに迷惑をかけたくない」――

そんな言葉を口にしながら、涙ぐむ方も少なくありません。「お話をして帰られるときに、『すっきりしました』『安心しました』と笑顔でお帰り



になる方が多いんです。お墓のことだけでなく、心の中のわだかまりや不安を整理しに來られるのだと思います。『墓じまい』は形の問題ではなく、心を整えるひとつの機会でもあると思います」

近年では、「大地に還る」という考え方も注目されています。

墓石を持たず、遺骨を自然へと還す「樹木葬」や「散骨」など、命を自然の循環の中に戻す新しい供養のかたちが広がっています。いわき市でも、株式会社TERRAID(テライド)がそうした取り組みを進めています。

代表の木村さんは、高蔵寺の住職のご子息でもあります。その木村さんはこう話します。

「私たちは、作業を代行するのではなく、気持ちに寄り添いながら『どう残すか』どうつなぐか』と一緒に考えています。それぞれのご家族に合った形で、安心して次の世代へ想いを渡していくお手伝いができればと思っています。」

親子それぞれが、立場は違っても「想いをつなぐ」

ことを大切にし、寺と企業という異なる場所から、同じテーマに向き合う姿が印象的です。

墓をしまうことは、亡き人を忘れることではありません。それは、形を変えて

想いをつなぐ作業です。お墓の前で手を合わせることも、家の仏壇で祈ることも、日常の中でふと故人を思い出すことも、すべてが供養のひとつなのです。

供養とは、場所ではなく、
「心」にあるのだと思います。

編集後記

取材の最後に、住職に教えてもらった言葉があります。

「卍字義（うんじぎ）」――仏教の教えにおいて、すべての終わりが、同時に新しい始まりでもあるという深い真理を示す言葉です。仏教で「阿吽（あうん）」という言葉があります。「阿」はすべての始まり、「吽」はすべての終わりを表します。しかし、「終わり」は決して完全な消滅ではなく、次の循環・再生・新たな始まりにつながるもの。この「終わり」と始まりはひとつである」という考えを表したのが「卍字義」です。

『墓じまい』は終わりではなく、大切な人への感謝を新しい形で伝えるひとつの、始まりなのです――。

